

## 基調講演

# 京都市上下水道局の取組と 今後について

## —— 新しい時代への挑戦 ——

谷田 聡  
Satoshi TANIDA

京都市上下水道局 下水道部長

## プロフィール



1998年 京都市下水道局入局  
2023年 京都市上下水道局下水道部 担当部長  
2024年 同 下水道部長

### 1. はじめに

京都市の下水道事業は、昭和5年に着手し、まもなく100年目を迎えようとしています。昭和9年には本市最初の処理場である吉祥院処理場、昭和14年には本市最大の鳥羽処理場（現 鳥羽水環境保全センター）が運転を開始しました。その後、平安建都1200年となる平成6年度には市街化区域の面整備が概成し、現在では人口ベースで整備率99.5%にまで至っています。また、本年4月に水道行政が厚生労働省から国土交通省（一部環境省）へ移管されましたが、本市ではそれに先立つこと約20年前、平成16年4月に当時の水道局・下水道局が統合し、上下水道局としてスタートしております。

長らく続いた水道・下水道の普及・拡大の時代を経て、現在では維持管理、そして改築更新が大きなテーマとなり、市民生活には欠かすことのできない重要かつ巨大なインフラを、どのようにして次世代へと引き継いでいくかが重要なミッションとなる一方で、浸水や地震をはじめとする災害への備え、脱炭素や創エネルギー・有効利用など、取り組むべき課題は多岐にわたっています。

### 2. 上下水道局の取組

本市では、将来にわたり安定的に下水道事業を持続していくため、5年間の具体的な実施計画である「中期経営プラン2023-2027」を策定し、これに基づいて事業を推進しています。コロナ禍の影響は薄れたものの、節水型社会の定着による水需要の減少や、管路・施設の老朽化といったこれまでからの課題に加え、物価高騰の影響が継続するなど、引き続き厳しい経営環境に直面しています。そうした中であっても、水道・

下水道を未来に継承・発展させていけるよう、経営基盤の強化に取り組みながら、老朽化した管路・施設の更新・耐震化、「雨に強いまちづくり」に向けた雨水幹線の整備等、プランに基づく各事業を引き続き着実に進めるとともに、大規模太陽光発電や下水汚泥の有効利用といった環境対策、お客さまの利便性向上の推進、職員の技術力の向上・技術継承など、将来に向けての取組についても進めています。

### 3. 新たな視点とその必要性

水道・下水道の役割や重要性は、これまでもこれからも不動のものであることは間違いありません。しかし、従前の概念や手法をそのまま踏襲するだけでは、これを維持していくことはもはや不可能であるといっても過言ではないと考えられます。例えば、昨今の進化には目を見張るAIやドローンといった新技術については、貪欲に水道・下水道事業に取込み、適用していく必要があります。当然、それを適正に理解・評価し、モチベーションをもって事業に導入していくエネルギーを持った人材が必要不可欠であり、官のセクターにおいてこれを増やしていくことが重要と考えます。

まだまだ草の根活動のような取組ばかりですが、本市では、新技術を感じ考える機会や場の創出から始まり、実際に他分野の技術を使った小さなイノベーションへとつながった事例も生まれつつあります。この取組を継続していくことで、未来を「考え、感じる」ことができる人材を育て、産・学との連携をよりいっそう深め、水道・下水道でのイノベーションを生み出し、次の50年、100年へとバトンをつないでいくことを目指してまいります。